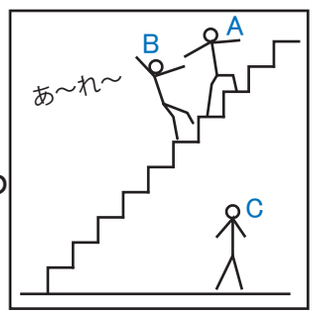
整君の気になる話「真実は一つではない」
先ほどの冤罪事件で別の警官（青砥巡査部長）との会話です。
青砥部長は、過去に別の事件で容疑者を逮捕しましたが、その証拠が固まらずに冤罪事件（えんざい：無実の人を逮捕すること）を起こした過去があります。
整君は、冤罪をかけられている身なので、「また冤罪事件をおこすんですか？」と嫌味を言います。
青砥「冤罪じゃない久能くん、オレは今でもあいつが犯人だと思っている」、「ただ、ヤツのウソを暴けなかった」、「こちらの不手際だった」、「同じ案件では裁けないが、いつか必ずあいつを挙げてやる」、「君が殺しをやっているなら君もだ」、「どれだけ虚言を尽くしても、真実は一つなんだからな。」
整君「真実は一つなんて、そんなドラマみたいなセリフをほんとに言う人がいるなんて」、「青砥さん、真実は一つではないんですよ。」
青砥「何を言っている？」、「真実が2つも3つもあったらおかしいだろ？」
整君「そうですか？、たとえばAとBがいたとしましょう」、「ある時、階段でぶつかってBが落ちてケガをした」、「Bは日頃からAからいじめを受けていて、今回もわざと落とされたと主張する」、「ところがAは、いじめている認識など全くなく遊んでいるつもりでいる」、「今回もただぶつかったと言っている」、「どっちもウソはついてません、この場合真実って何ですか？」



青砥「Aは、いじめてないんだから、Bの思い込みだけで、ただぶつかった事故だろう」
整君「本当に？」、「いじめてないというのはAが思っているだけです」、「その点Bの思い込みと同じです」
「人は主観でしかものを見られない、それが正しいとは言えない」、「ここに一部始終を目撃した人がいたとして、更に違う印象をもつかもしれない」、「神のような第3者がいないと見極められないんですよ」
青砥「それは屁理屈というものだろう」
整君「だから戦争や紛争でしたこと、されたことが食い違う」、「どちらもウソをついていなくても、話を盛ってなくても、必ず食い違う」
「AにはAの真実がすべてで、BにはBの真実がすべて」、「真実は一つじゃない」、「2つや3つでもない」
「真実は人の数だけあるんですよ」、「でも、事実は一つです」。
「起ったことは、この場合はAとBがぶつかってBがケガをしたということだけです」、「警察が調べるのはそこです、人の真実なんかじゃない」、「真実とかあやふやなものにとらわれるから冤罪事件とか起こすのでは？」、「僕は殺っていません」

最終的に、警察官が証拠をでっち上げていて、整君が犯人を探し当てて事件は解決しました。
当事者であれば、感情が入り冷静な判断は難しそうですけど、整君は乗り越えました。
ここでは戦争についての話がありましたが、現在行なわれているロシアとウクライナの戦争も第3者からみるとロシアが悪いと多くの人が思っています。
ですが、プーチンから見ればウクライナは元々旧ソ連の領土でそれを取り戻して何が悪いんだ！という気持ちから戦争を起こしたと言われています。
ロシアの国民は、この戦争が起きても77％が政府を支持すると答えたと言われていて、ロシア人をヘイトするような発言がありますが、ロシア人は政府からウクライナに進行する正当性を言われ続けているために、そのような支持率となっているのかもしれません。
こうやって考えると日本で報道される情報も情報を出す側が選んでいます。
物事を捉えるためには、感情を押し殺して客観的に事実だけを見て、慎重になる必要がありそうです。